

私の 3 冊

清水 美緒子

しみず・みおこ 言語聴覚士 26 年目

在宅総合ケアセンター成城 成城リハケア病院

回復期病棟でのリハビリテーション、外来リハビリテーション、通所リハビリテーション、訪問リハビリテーションのすべてにかかわって働いています。また、居住地が千葉県にある縁で3年前から千葉県の失語症者向け意思疎通支援事業のお手伝いをしています。回復期から生活期とその両方を同時に経験させていただいているなかで薦めるの本をご紹介します。

後輩に薦める 2 冊



訪問で行う 摂食・嚥下リハビリテーションのアプローチ

戸原 玄 編集

全日本病院出版会 2007 年

訪問リハビリテーションの現場では、どんなにリスクがあっても利用者本人やご家族から「食べたい」、「食べさせたい」という切なる依頼を受けることは多いです。訪問リハビリテーションに携わり始めた当初はその期待が重く感じましたが、評価の視点が多岐にわたるので自分一人ではとても進められないと、この本が気づかせてくれました。本人を主体とするチーム全員でリスクと対応策を共有する、多職種連携のためのポイントが書かれている実用的な 1 冊です。



リハビリナース 2021 年秋季増刊 うまくいかなかった事例は学びの宝庫だった 回復期リハ病棟の失敗する介入×成功する介入

岡本隆嗣, 杉本真理子 監修

メディカ出版 2021 年

「病棟全体の運営」、「教育」、「チーム運営」、「専門性・相互理解」の4つのパートに分かれて事例が紹介されています。1つの事例に対して職種ごとの失敗介入と成功介入が記載されており、回復期リハビリテーション病棟で働く誰もが「あるある」と頷きながら読むことと思います。では自分の専門領域だけではなく他職種の動きにも目を配っていたか、他職種に対し自身の行っていることを発信できていたか、他職種理解のヒント満載の新人向けの冊子です。

自分の 1 冊



ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力

帯木蓬生 著

朝日新聞出版 2017 年

ネガティブ・ケイパビリティとは、「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」をさします。思いもよらぬ事故や病気に遭い悲しむ患者さんと向かい合う際、この方の心の痛みをどのように受け止めればよいのか、自分まで追い込まれるような気持ちになることはありませんか？ 精神科医であり作家でもある著者が医療の現場や古典作品、教育の現場にみるネガティブ・ケイパビリティを説いてくれます。読むと心が落ち着き、自身のあり方を考えさせてくれる本です。